

副院長あいさつ — 循環器救急診療を始めて13年間—

副院長(労務管理・病床管理担当)、循環器内科科長、循環器救急センター長 久木山 清貴



日頃は、看護部、放射線部、その他関連部署の多くの方々のご支援を受けていることに深く感謝いたします。私が山梨大学に赴任した13年前、全国の国立大学医学部附属病院の循環器内科で積極的に救急診療を展開していたところは少なく、赴任した第二内科でも同様でありました。大学病院循環器内科の地域医療で果たすべき役割で重要なものは、高度な医療機器、トレーニングされた医療技術を駆使して、重症循環器疾患の救命救急診療を行うことであると信じています。卒前・卒後教育の面でも、急性心筋梗塞や重症心不全等、講義では教えてもらえるのがその当時の多くの医学生であり、本院も同じでありました。医学科および看護学科の学生、

研修医、若手循環器医師、新人看護師、放射線部における重症循環器疾患の救命救急診療の教育を充実させるために、必要な最低限の循環器救急症例数の確保が求められていました。そこで本院と地域の診療所・医療機関との病診連携を確立することに努力いたしました。それから13年間経ちましたが、重症心疾患の受け入れ数は年間100例を越えるようになり、やっと実習に必要な症例数を確保でき毎週の学生の臨床実習が格段と充実するようになりました。また、7階東西病棟の若手看護師を対象としたミニレクチャーも毎年10コマほど行い、看護師の重症循環器症例の看護レベルの向上を図っており、最近やっと軌道に乗ったという状況です。まだまだ、問題は多くあり、残されている課題は山積みではありますが皆様方のご協力を得ながら、さらなる充実に努力していきたいと考えます。

副看護部長就任あいさつ

副看護部長 萩原 千代子



平成26年4月1日付で副看護部長に就任いたしました。手術部、病棟師長を経験し、昨年度はゼネラルリスクマネージャーとして病院全体で安全・安心な医療が提供できるよう、医療事故防止対策、インシデントレポートの分析や院内研修企画等に取り組んでまいりました。

副看護部長としての担当業務は、質保証担当であり、安全管理・感染対策・防災対策を中心とし、昨年度の経験も活かした上で業務を実践しています。

社会全体では少子高齢化が加速し、病院を受診する患者さんも高齢者の割合は非常に高くなっています。医療へのニーズも変化していく時代であり、今年度の診療報酬改定では、

重点課題として「医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実等」が挙げられています。また改定の視点の一つは、「患者さんから見て分かりやすく納得でき、安心・安全で質の高い医療を実践する」とされています。医療の質を高めていくために今何が必要なのか、大学病院としての役割を踏まえて業務を行っていき考えています。

次年度には新病棟への移転も控えており、病院全体が再整備されていく中での安全の確保や感染防止対策、セキュリティ対策も今後の大きな課題です。

「病院全体がひとつのチーム」という方針のもと、それぞれの部門や職種間での連携を図り、チームワークを大切に、これからも医療・看護の質向上を目指し、副看護部長としての業務に精進してまいりたいと思います。

リハビリテーション部技師長就任あいさつ

リハビリテーション部技師長 小尾 伸二



今年度よりリハビリテーション部技師長に就任いたしました。開院当初は整形外科理学療法室という特殊診療施設としてPT 3名で対応していましたが、徐々に大学病院でのリハビリ

テーションのニーズが高まり平成14年より中央診療部門リハビリテーション部に位置付けられ、現在ではPT 6名、OT 3名、ST 1名の10名で全診療科のニーズに対応すべく業務にあたっております。

多種多様な「疾患別リハビリテーション」と「早期リハビリテーション」が求められる一方、「がん患者リハビリテーション」「糖尿病運動療法」「褥瘡対策」などの「チーム医療」も要求されるため、殆ど全ての診療科や部門の皆様と関わらせていただいております。昨年より波呂部長のご指導の下に、速やかにリハビリが開始出

来るよう、整形外科・脳外科・神経内科・耳鼻科から直接療法士にリハビリ処方するシステムに変更いたしました。必要書式や内容についてはまだ周知できていない点もあり、医師・看護師の皆様方にはお手間を取らせる機会も多いと思いますが、ご協力の程よろしくお願いいたします。

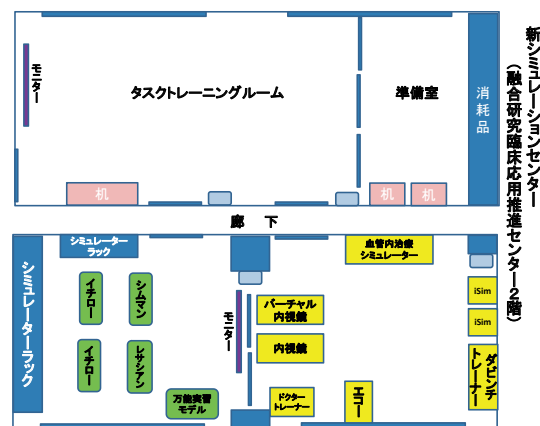
現在、国立大学病院のリハビリテーション部門では一般病棟専属リハスタッフの配置やER・ICUなど急性期病棟での早期リハの充実といった病棟専属の問題、また、リハスタッフに対する教育では特定機能病院としての高度専門性の獲得と教育機関としての総合的臨床家の育成という異なる必要性が生じている問題など様々な問題を抱えております。私どもスタッフ一同、多くの需要に答えられるよう努力し、本院の状況に対応できるリハビリテーション部門を目指しておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

新シミュレーションセンターの開設

臨床教育センター長 板倉 淳

平成23年9月にシミュレーションセンターは医療人の育成・専門能力開発・生涯教育の充実を目的に設置され、この6月に新たに融合研究臨床応用推進センター2階に移転いたしました。これまで主に若手医師のスキルトレーニング、高校生を対象とした医療体験、臨床実習などに活用されてきましたが、標本館の一部を改修した狭いスペースでご不便をお掛けしていました。今回、新たに多目的スペース（タスクトレーニングルーム）も確保され、多人数での実習も可能となり、4階会議室を使ったデブリーフィングも含め、より充実した利用が可能になったと考えています。また、これまで各診療科での臨床実習では不十分だったタスクトレーニング、医療面接等も新たな実習環境を提案していきたいと考えています。専門医実習としても、内視鏡下手術トレーナー（i-Sim）、DaVinci トレーナー（Mimic）、血管内治療シミュレーター（VIST）、高機能患者シミュレーター（SimMan）など高度な機器がそろい、学内外の方々への利用も勧めていきたいと考えております。同時により多くの方々に便利に、また安心して利用していただくためには、セキュ

リティを含め運用上のルール作りも重要となってきます。イントラを使った予約・申し込みやカードリーダー、カメラシステムによるモニタリング等の設置も進めておりますので、どうぞご理解のうえ多くの方々の教育にお役立ていただければと考えております。



新シミュレーションセンター配置図（上）と血管内治療シミュレーター（VIST）

臨床研究資格制度の導入及び実施について

臨床研究連携推進部長 岩崎 甫

昨年以降、数々の大学病院における臨床研究での不正行為が広く報道されており、日本の臨床研究の信頼性は大きく失われました。患者さんからも治験も含めて臨床研究には参加したくないなど批判的な声が届いています。しかし、これからの医療をより良いものとするためにも臨床研究は必要であり、本院はその責務を負っています。私ども一人一人が自ら襟を正して患者さんからの信頼の下で質の高い臨床研究に取り組むためには、研究に必要な基本的な事項を習得することが大変重要です。

このような状況を踏まえ、本院では、臨床研究に携わる全ての方々に対して必要な研修を実施するため、本年度より臨床研究資格制度を導入しました。これにより、本院で臨床研究(治験も含む)を実施する場合は、年10回開く講習会を1年に3回以上受講するか、または指定されたe-ラーニングを履修して、臨床研究実施資格を取得する必要があります。

治験や臨床研究を実施するには一定の厳しいルールに従うことが求められており、臨床研究に携わる人はもちろん、研究責任者、研究機関の長にもそれぞれの責務が規定されています。

また、今年度は「臨床研究に関する倫理指針」と「疫学研究に関する倫理指針」の統合が予定されており、その中で研究の信頼性確保が強く求められています。このような背景を踏まえ、今年度の講習会は、臨床研究を実施する上で理解しておくべきことをテーマに企画しましたので奮ってご参加下さい。資格制度に関するお問合せやご意見は、臨床研究連携推進部(内線3215)へお願いします。

山梨大学医学部臨床研究資格制度		
講習会受講証		
—平成26年度—		
所属： 氏名：	月 日	月 日
問合せ先：山梨大学医学部附属病院 臨床研究連携推進部		

山梨大学医学部臨床研究資格制度		
月 日	月 日	月 日
臨床研究資格 講習受講証	臨床研究資格 講習受講証	臨床研究資格 講習受講証
月 日	臨床研究実施資格証明書 臨床研究実施資格の条件を満たしている ことを確認し、本証明書を発行します。 登録番号： 9999 有効期限： 年 月 日	
e-learning 修了証明書		

(表)

講習会受講証

(裏)

防災トリアージ訓練の実施について

医学部管理課病院契約グループ 係長 井尻 勝登

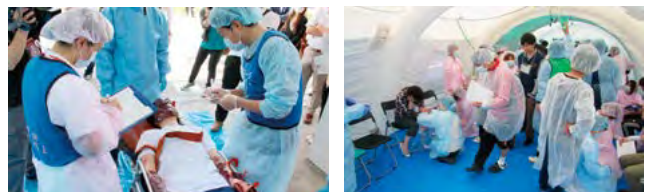
5月24日、医学部キャンパスにおいて14回目のトリアージ訓練を実施いたしました。今回は「山梨県全体がひとつのチーム・アゲイン」をキーワードとして、昨年に引き続き「連携」をテーマとしました。学外10施設32名の医療者を含め、全体では、学内参加者502名、学外参加者39名、見学者48余名、総勢約590名の方々に参加していただきました。

今年の訓練では大きな変更点が3点ありました。まずは、各ゾーンの変更です。例年外来ホールを緑ゾーンにしておりましたが、今年度は病院ロータリーのバス停前にエアテントを2基設置し、それを緑ゾーンとしました。軽傷者は病院正面玄関前でトリアージ後、病院内に入らずに治療をして終了する動線です。緑ゾーンを外に出すことにより空いた外来ホールを黄ゾーンとし、内科外来受付周辺を赤ゾーンとしました。当日は気温が上がり、エアテントの中は大変暑かったです。夏期に使用する場合は、何らかの対策が必要になりそうです。次に外部DMATの受入れです。学外の3施設から14名のDMAT隊員が参加してくださりました。本学DMATと連携して、各ゾーンで治療に携わって

いただきました。初めての受入れということもあり、どう関わってもらうのか役割等が曖昧だった点は反省です。最後は部分的な消防訓練です。地震と同時に病棟で火災が発生したというシナリオで、一部の看護学科生と看護学科教員に、病棟から避難誘導訓練を行っていただきました。また、トリアージ訓練の反省会終了後、医学科生及び看護学科生には、体育館付近で水消火器を用いた消火訓練と消火栓からの放水訓練に参加していただきました。

反省点も色々ありましたが、全体的には無事に訓練を終えることができたと思います。また、今回の訓練の結果を踏まえ、より良い災害医療が提供できるように努めたいと思います。

最後に、訓練に参加していただいた皆様、ご協力ありがとうございました。そして、暑い中お疲れ様でした。



トリアージ訓練の様子

「一日看護師」について

副看護部長 佐藤 あけみ

看護普及事業の一環として、看護に関心のある高等学校生徒を対象として、6月3日に一日看護師が実施されました。本院では山梨県立甲府南高等学校2年生16名、山梨英和高等学校2年生4名、合計20名が看護体験を行いました。白衣に着替え、各病棟にて看護師と一緒に看護を体験しました。

終了後の座談会では参加した学生さんから「看護師さんの患者さんとのコミュニケーションが素晴らしかった」「大変な仕事ですが、とてもやりがいのある仕事だと思い、看護師になりたい気持ちが強くなった」等の意見が出されました。病棟からも「学生さん達の一生懸命に看護師を観ている姿勢が伝わり、初心に帰ることができた」「看護師になりたい気持ちが伝わってきた」等の評価が得られました。今年度は一日看護師に加え、夏休みを利用した職場体験として、県内の中学校・高等学校の方を受け入れ、本院で看護体験をしていただきました。

また、今年度の就職ガイダンスでは、「一日看護

師でこの病院に体験に来ました。その時から、この病院の看護師になりたいと思っていました」という方がいました。本当に嬉しい限りです。

今後もこれらの事業を積極的に受け入れ、看護についての理解と関心を深めていただき、将来看護を志す動機づけとなるようにしていきたいと思います。



看護部長の説明を熱心に聞く学生さん



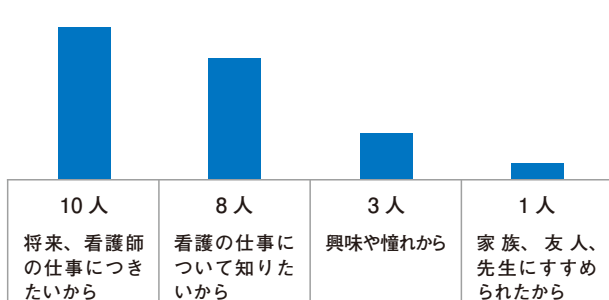
座談会の様子

学生さんからの主な感想

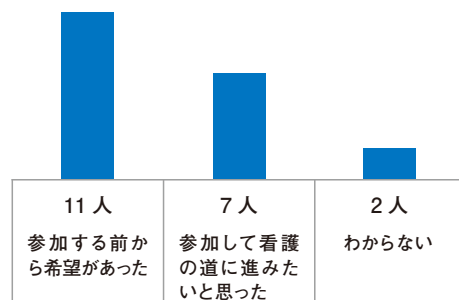
- ・患者さんへの思いやりが大切だと感じた。
- ・看護師がどんな仕事をし、どんなふうに患者さんと向き合おうとしているか分からずだったので、病院内の様子を知ることができ、とても良い経験になりました。
- ・看護師さんは「大変だけど、すごくやりがいがあって楽しい」と笑顔で語っていたので、「私も2年後このキャンパスで働きたい」と思った。
- ・今後の進路を決める上で大きな参考になりました。
- ・看護師の方が忙しい中でも仕事について一つ一つ丁寧に教えていただきました。初めて知る事、見るものも多く、とても良い機会でした。
- ・イメージと違うことや看護師さんの意見を聞いて、今まで以上に興味がわいた。

アンケートの結果

一日看護師に参加した直接の動機はなんですか？
(複数回答)



将来看護の道にすすむ希望がありますか？



多くの学生さんが一日看護師を体験して、より一層「看護師になりたい！」と感じたようです。

緩和ケア研修会について

医療チームセンター長 飯嶋 哲也

去る5月31日・6月1日の2日間、附属病院管理棟大会議室を会場に平成26年第2回山梨県緩和ケア研修会（開催責任者：島田眞路病院長）を開催いたしました。この研修会は平成20年4月の厚生労働省健康局長通知「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会の開催指針について」に準拠したものです。合計12時間余におよぶプログラム中に、講義だけでなく2回のロールプレイ、2回のグループワークが含まれている参加型研修会であることが最も大きな特色です。「がん患者指導管理」などの診療には本研修会の修了が必要とされています。板倉淳臨床教育センター長のご配慮により、本年から本院臨床研修医には必修の研修会となりました。参加者総数は46名でした。参加医師35名のうち本院からは初期研修医が27名、医師3名、本院以外の県内医療施設医師が5名でした。また、本来は医師向けの研修会ですが、本院看護師4名、県内訪問看護ステーション看護師2名、本院薬剤師5名にも参加していただき、よ

り実践に即したグループワークができました。この研修を受けた医師の総数は全国で4万人を超え、山梨県内でも400名を超えています。平成25年6月に改訂された「がん対策推進基本計画」では「がんと診断されたときからの緩和ケア」が重点項目として挙げられています。

全国標準の緩和ケア研修会として、今後もこの研修会の役割はますます重要性を増してくるものと考えられます。



研修会の様子

富士山8合目救護所ボランティアに参加して

集中治療部 医員 菅原 久徳

古来、信仰の対象であり、また葛飾北斎に代表される芸術上の主要な題材として昨年、富士山は「富士山 - 信仰の対象と芸術の源泉」の名で世界文化遺産に登録された。近年のマイカー規制に伴い登山者数は大きく上昇はしていないものの、昨年のシーズンは23万人であり、世界遺産登録に伴い、今後は外国人観光客を中心に増加が見込まれる。その吉田ルート8合目に位置する山小屋「太子館」に併設する形で富士吉田市と山梨大学が共同運営する救護所がある。標高3,100m、日本一高い救護所だ。



御来光を背に。左から菅原医員、松澤研修医、大久保県立中央病院看護師、矢崎歯科技工士

今回、第2班として7月24日から26日の間、そのボランティアに初参加した。救護所を訪れる人の多くは、頭痛、嘔気を

中心とした所謂「急性高山病」である。重症化した場合は、高地脳浮腫・高地肺水腫を来す。急性高山病は急激な高度上昇に伴い生じ、2,500mで25%の人に軽微なものを含め症状が出現するとされている。予防や対症療法はあるものの、根本的には低地への移動のみが治療となる。高地馴化により症状は緩和することもあり、実際に訪れた方に対しては、症状や今後のスケジュールを加味した上で適切なマネジメントを施す必要がある。普段の診療では決して出会わない疾患であり、特殊な環境下での対応は当初試行錯誤した。しかし、幸いにも救護所ボランティア経験の豊富なメンバーが揃っており、大過なく終えることが出来た。診療の合間を縫っての登頂、お鉢巡り、御来光、富士登山競争の観戦と診療以外でのイベントも豊富であった。

今回、貴重な経験が出来たという充足感とともに、機会があれば次回以降も参加したいと思う。最後に、適切なアドバイスをくれた班員と食事の提供や患者さんの搬送をして頂いた太子館スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

「看護功労者」表彰を受けました

副看護部長 佐藤 あけみ

5月16日、山梨県看護大会が山梨県及び山梨県看護協会主催により行われ、本院の杉田節子看護師長及び長田玉枝看護師長が看護功労者として表彰を受けました。

「看護功労者表彰」は県内で20年以上にわたり看護職に従事し、特に功績の優れた方々を表彰するものであり、平成26年度は19名が表彰を受けました。



左から杉田看護師長、
長田看護師長

<表彰者のコメント>

(杉田節子看護師長)

結婚を機に山梨に転居し、環境が許すならずっと働きたいと思っていました。今回、看護功労賞を頂き、改めて働き続けられた事に感謝しています。多くの患者さんや御家族との出会いや働く素敵な仲間に出会えた事は財産です。本当にありがとうございました。

(長田玉枝看護師長)

このたび、看護功労賞をいただき、今まで支えていただいた皆様に感謝申し上げます。病院の歴史を創ってこられた多くの諸先輩のご指導にも大変感謝しております。これからも明るく元気に頑張っていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

七夕コンサートを開催

総務課長 丸山 さとみ

本年度7度目の催しとなる七夕コンサートが、6月24日の夕方、病院玄関ホールにおいて開催されました。ホールに飾られた七夕飾りを眺めると、短冊には患者さんご自身やご家族が想いを込めて綴った病気の快癒と一日も早い退院を祈る想いがしっかりと書かれていたり、中には小さなお子さんが一生懸命綴った文字もあり、七夕コンサートの実施の意義について再認識させられました。

島田病院長からの闘病の日々を送る患者さん方への励ましを込めた開会挨拶に続き、県内を中心に活動されている女性3名の演奏グループ「パルフェ」の軽快な演奏で幕を開け、医学部交響楽団のアンサンブル演奏やオーケストラ演奏がダイナミックに行われました。

出演していただきました皆様方に感謝申し上げるとともに、七夕飾りに込めた様々な願いが天に通じることをお祈りしております。



パルフェの演奏。ヴァンくんも参加してくれました。



医学部交響楽団の皆さん

納涼花火大会を開催

総務課総務グループリーダー 土屋 豊

7月30日、附属病院西病棟南側空き地において、恒例の納涼花火大会が開催されました。この催しは、主にお盆の時期を病棟で過ごされる患者さんやそのご家族の皆様へ、少しでも楽しい時間を過ごしていただくよう毎年開催しているものです。参加した子どもたちは、ヴァンフォーレ甲府から駆け付けたヴァンくんと一緒に輪投げ、射的、ヨーヨー釣りなどを楽しみました。午後7時、島田病院長の挨拶に続き手持ち花火が始まり、最後は参加者のカウントダウンとともに、次々とあがる打上花火に場内から自然と拍手喝采が起き、素晴らしい夕べとなりました。



島田病院長・ヴァンくん・丸山総務課長。



上は夏祭りの様子